

古史通

卷七十九

共貳本  
七十九

太政官文庫			
			和書門
		一四三六號	
	七八	函架	
二冊	架		

206

內閣文庫			
			和書類
		一四三六號	
	一函	架	
一冊	架		

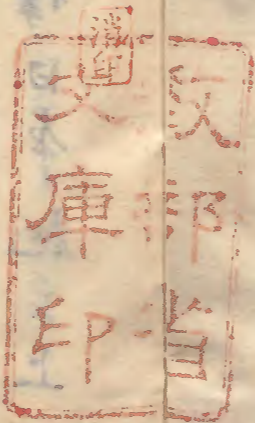
內閣文庫		
番號	和	11436
冊數		2 ( 1 )
函號		141 206





古史通讀法凡例

讀法



本朝上古此事を記せし書を觀るに其義を語言

に求め其記せし文字に拘るをわづら

し古の代に於て文字とよみとのあはれず先せり

して言解し事と後世の人もまこと言解す

しめし人皇十六代のみうと應神天皇十

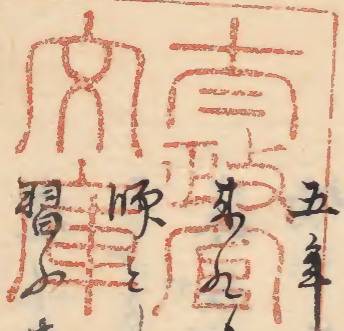
五年に秋百濟王に貢使阿直岐といひしもの

あり此人經典を讀事と能せしかば菟道比古子

順とて學びて我が國に於て今の文字を傳

習ふ事と成りて是れも其代に於てなり

し是れは第十八代履中天皇四年に秋





始て諸西の國史を著し言事と記しと四方の志を  
達し多ひは我國の今字此の如く事此の如く  
是の如く第三十四代推古天皇二十八年此春上宮太子  
蘇我馬子宿禰と共に勅を奉らるる如く古事記と  
脩て先代舊事本紀と撰ぶる其代に古記といひし  
ものも後中天皇始て國史を著し言事と記さ  
しめらるる如く後之彼先世より言嗣中語嗣が  
し多し今字を用ひしと著しし如く如く如く  
されし其今字を用ひし如く如く如く今俗に倭名と  
しめらるるを用ゆる事此の如くに漢字此の聲音を  
倭りて我々の語を記しし如く也釋日本記の上

言記に倭名ハすむに舊事本紀に前よりあり倭名の  
本ハ此書に前よりありし如く如く如く如く如く  
け也上宮太子舊事本紀を撰り如く如く如く如く  
たはば漢土の人ハ梵語を譯して著るむに漢字  
を用ひし如く如く如く其字義を取て其字音も  
如く如く如く其文字を讀む事は其字音もよ  
らば如く我々の語を著るむに如く如く如く如く  
如く如く如く如く如く如く我國の歌謡の  
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く  
漢音を倭りて其梵音を如く如く如く如く如く



皆其字音を假用ひて其字義を假し是は上宮  
太子祢しと聖也とせども聖人本字を盡く知り  
盡く能くしるはばる所あきば其字を用ひらるる  
盡く其義をおかぬ所あきまはるるは其後乃  
曰十三代元明天皇和銅六年の春太朝臣安麻  
呂勅を奉りて撰録せし古事記の舊事記の  
用ひらるる所の文字を改めざるもの多くして  
其序あり敷文構句於字即難已因訓述者  
詞不逮心全以音連者其趣更長くはるる  
しるはる假用ひるの字によらておれ正實と遠ひて彼  
虚偽を加ふ事を恐るるが故と見えしるるを以て凡

上古乃事を記せしものと親らぬ其記せし不乃  
文字の拘りしと其義と語言の間に求むる  
との中す也 正實と遠ひて虚偽と少あるは第四代天武天皇の  
時時花家と傳ふる所の帝記を辨既して西実と遠ひて多くハ  
虚偽を加ふる事多しと云ふなり古事記の序に詳也を乃事乃  
由を推し考ふるに舊事記に假用ひらるる所の字によらて異字荒謬  
の説を招致さきし多しと云ふなり伊弉諾尊と云ふさまはよりて  
禊祓の伊弉那天とれ也とりの磯取虚鳴と云ふさまはよりて禊祓の噫呼  
尊の義しれ也とりの大日靈貴と云ふさまはよりて日天子大日如來と乃  
説らるる海神と云ふさまはよりて龍神龍女と説らるるまことしるるの  
盡くするまふ  
いと多あはるる  
古事記序の全ク以音連者、事の趣更長とみえしは凡今  
字を假り用ゆるる俗より所の名假名を用ゆる  
法乃てたる時ハ其字の多くありて其句もま  
長くたるをとりし也たゞ其字の多くして其句は



長きものも何れにせよ假名をとり用ゆる法もあらず  
かゝる事あるやたとせば我国の方言に日と呼びて  
比とり也假名をとり用ゆる法もあらず今字の音を取  
比の字を用ひんもの我國の方言に比とりよもの多し  
いづきのものを何れにせよ事其疑ひあらず  
今字を假用ひて讀て比とりよもの日。火。水。極。核。  
の難。雪。ホ。その語皆同じ其字音も同じしよ不細心なれば  
其字義も取りて假用ひざる事をも難し  
我國よしては日とさして比とりよ日の字も比の音あらず  
いあつたが其字ハ我國よりして比とりよもの即此也  
これよりして其ノ字を用ひ讀て比とりよが故にこれを  
假るとはせず也

辨一誤あり或ハ疑ハ似ありよとていつおの本実も違ふ  
あれだ九我必上吉と事と記せしものを親らふ其義を  
語言と名と求めて其字と物とをなをるべしハ中す也  
たとへば我國上古の俗ニ海を呼て阿麻としか天を呼て阿麻としか阿麻又  
阿麻としか阿麻ともいふことよりして言天京とさるるをいふこと海上海地  
とさすといふことと解せしめて上天とさるるも虚空とさるるもいふが  
如きものハ假用ゆるもの字其疑ハ涉るるが故也其字も物もななくして  
其古の俗多阿麻能播羅としか語言もよめて其義を求る所ハ  
多阿麻國の海上なるものなり

九經史をのり其辨を異うを史ハ實め據る事と記し  
て世の鑑戒を示すもの也我國の史ハ舊唐本紀と  
以て始とす日本書紀ハ又舊唐本紀と擬して撰録せし  
こと一也とすなりたとい其射製異朝史漢  
書も同じかゝるものなりとも其史も同じハ



これ因りてゆきよ後の日本書紀と講解するもの上吉此  
事とむてハ詭辨楚逐て一ツハ異端の如し其言と  
得ざるに及びてハ神道不測以て論ず危くばとよ  
太古朴陋く俗りづれの國よりなるを益き異朝の書に  
りよその盤古氏大荒の世に生れて其頭四岳とあり其  
眼日月とありしといゆ事これとよき女媧氏石を鍊りて  
天地神ハ殺魚を断て四極を立しといふ事の如き皆  
是我國よりして太古の時の事と言嗣き語嗣くに因  
りて嶋荒と世聖人不取らといふ事はたゞ其疑の  
荒誕あるとめもあはれ其疑を嗣き語ひしが故也  
揚朱列御寇が如きハ世の謂ふ所の異端の徒也ゆれ

とも列子の書に揚子が言はをあるしと太古の事滅び  
たり然るに其志さんや三皇の事存するが如く此す  
るがごとく五帝の事覺るが如く是るがごとく三五の  
事或ハ遠き或ハ顯る億の一二を識るが如く是るが  
或ハ聞き或ハ見る美の一二を識るが如く是るが  
た一或ハ廢す千の一二を識るが如く是るが  
古の事又これと因りてこれを舊事記とて一亦も  
あるが如く是るが如く是るが如く是るが如く是るが  
覺ゆる人のその一と愛を後と似たる事ども  
世の人此言嗣き語嗣き一その隠れしを顯るは  
其異同あ類する小記を是れハ其疑を傳へ







地皇氏十一世也九頭と云ふ人皇氏兄弟九人也又女媧  
氏石を鍊りて天を補ひと云ふも石を敲きて火を  
えり 昏黒の憂を通ども天の及ざるを補ひれ也  
これ後世の膏を焚き 器に継ぐ此姑也又義和氏日世  
生みと云ふも甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十日と云ふは  
此始り 常義月を生じしこりも二十日成積にて一月と  
あり十二月を積む一年とする事あり云ふは此始りこれ  
後世曆日の始也又宮屯が歎ふ人語 銅鉄の類あり  
しと云ふもこれ後世金草此草の始也皆是れ太古の  
俗朴質の言とあり不すべしけふの類 讀者 辞と云て  
意成害する事なるべしと云ひ傳へしは我國上古の

事共を言 翻し 後り 翻きし 不も 又かくのごとし 其詞を  
巧し 意を害する事あり云ふ人 其書を讀む事の要旨と  
す 成きとも也

凡天下の言ふは古言あり 今言あり 其古今此るに  
おひし 又其方言あり 其方言の中は 又おのく 雅言  
あり 俗言あり 又 辨め 成き事也 古言とは 太古  
より 近古より 至るまでをの 吾世の人より 此の語  
言也 今言とは 今世の人より 此の語言なり 今 吾方の人  
の語言おのく 同一か ざる 不あるのこも あり あり  
古乃 時とし とも 又をの 其世とあり して 吾方の語言  
同一か ぬ 不ある事 亦ある 今之 始り 古も 今も



中土東南西北方の人をも其人の雅なる所り候なる所り  
大やういふ人の子所多くハ雅言なりしや一きか  
り所ハ俗言ありざるハすくなくそれハ中古言の今に  
傳ふる所の論ずるも及と候又今の人ハ所ハ俗の古  
言ハ出て其解説とすべしと其義明くするもの  
又論ずるも及べ古言の今も程のこりて今の人  
ハ所ハ俗言あり候とも其義の解すべし又解す  
べしと傳ふるものもすくなく候ハ俗言の書に釋法  
釋言ありし事ハ古言今言其異なりとこれ我  
解と人をして知しむるを釋法とす也古今の  
間五方の言の終通ずる事あり候これと解と人

して知しむるを釋言とす也子載乃下に生れと  
子載の古と論じ一方の内ありては方の外と通ぜん事  
雅なりと候中登るべしと前よりあるせ我國上  
古乃事終記せし書と觀るも其義と強言のあり  
求登しとありたりたやすから登きりにあはざる  
候とされど今言より推して古言ハ求めむ事遠  
我國乃外とあるも候候ば天地の大あると  
これとみむめハこれ又一方の強言なれば其事雅  
とのみも中登るべしと況や先達の人乃古今の  
言とお通しと釋をきし人もよく候と候は是より  
よりして其義を求めばその第一と候とある候と



とも中す登り〜  
舊事紀と古事紀。日本記古語拾遺ありは古語を釋せしむす〜ふか〜は傳歌の事と釋せしものふは〜古語と解せしむす〜も〜たる古の歌詞〜東南西北の方言あり〜多葉集を釋せし物ともも〜はり也

我國上古此事經經登り〜  
世の人の言詞

翻か〜  
我國の古言を譯〜其字を假用〜  
世〜  
あるを免〜  
傳つた〜  
撰述の〜  
不ふの如〜  
或あるの郡と郡〜

異朝の歷代易姓改號〜  
考か〜  
世の人其〜  
迹あとの肇はじ〜  
後のち〜  
以もつて天祖あまのむすね〜  
衷あはを降くだ〜  
登あき〜  
其そのりぬぬのの梵ぼん〜



其事を神よとてこれを秘するは天統を尊厳義也と  
りふ登りぬご其民を愚みとて自ら言ふ大よするは秦の  
二世にして滅びし而也天の照くとするは横目の民望  
て視ずとりふよのち其天より此所はよむての聖の  
又知りやまかすずあは其事を神よとてこれを秘  
けりがためふはあはれに我國の皇統の天地と共に悠久  
かこしませすなも又神よとて秘する事あり 後子  
なきあはあはれず

四十四代のみうと元正天皇養老四年の夏日本書紀  
撰述成しと美上ありしより舊事記古事記の書  
廢水と其後五十一代のみうと平城天皇大同二年

にむりて忌部廣成古語拾遺を撰進す世の人又これ  
をえしは其故は日本記美上ありしとての勅しと  
始て其書を撰せしめられしより歷代の天子儒臣  
よ勅して其書を撰せしめられしよりてつみよ世  
儒専門の學子とありしが故也むし孔子魯の國史  
春秋の書を筆削ありて後よ左氏公羊氏穀梁氏  
鄒氏鄭氏其學を傳ふれが中鄒鄭二氏の傳は  
七びて左公穀三氏の傳ハ世々の學者其學を傳て其  
況とするふおの同トかむとれご其傳ふるふものハ  
蓋し孔子春秋の學よりざりはあし孔子の春秋を  
學ばん者ハ其筆削意にわいて能くゆるふあを以て



能其學と傳ふるに付し、其事勿論也。然るに我傳ふ所  
の既孔子筆削の意をよく知たるに、其師説を以て  
こころあつらん事、然るに彼傳ふる所の既我傳ふ所  
不より其義長しむむ、我を以て、彼を疑むも又  
老く、たゞ其師説を以て、不なるも孔子筆  
削の意をあつて、ゆる不なるも、其を以て、稱して  
孔子春秋の學といへん事、あつらん。然るに本朝の國史  
を學ぶるも、又此事に似し、不あり。舊事記、古事記  
日本記の書ハ皆、これ朝廷の初旨に係りて、我朝  
上古神世より、始て歷代君臣の事業を記載せしむ  
し、不也。されど其志、ことごとく、不あり。を以て、異同ありし。

孔子春秋の書を傳ふるに、其説の異同あるに、  
此の專ら日本書紀の説の、老く、以て舊事記古  
事記の書、成廢せん事、あつらん。然るに、  
書の、あつたりとも、其事、實の、遠く、其理、義の、  
あつて、長しむむ、と、見ゆ。説の、あつたりとも、  
其、事、の、也、其餘、諸家の書、見し、  
の、西史、實録、の、也、其、徴、とする、に、  
舊事本記、乃、其、蘇我大臣、此序を、親に、上宮太子  
述作、いま、覺らば、  
が、  
更、  
今、其、書、を、



するに重祿階級その擧定すといふ所のものも是れ是れ成  
之書と云ふたり如の神奇鬼怪の事と云ふに其好む所  
淫して老よ入るれば佛と出づ後の異端の徒其説以  
附會する其由來のなきにあらば況や其筆を起す  
小男兒女房史婦偶を成すといひ其筆を絶つ子姪  
姨母父子鹿を聚ふすといふ名教よあつてなみの教り  
鑑戒のあつてなみの戒とするにあらば其後の述者其謬  
を發して其非を覺らざる後の統者其非を知りて其謬を  
正すは豈是の皆神道の不測と次以て辨せざる事と  
し伊特諾伊特丹兄と妹とありて史婦とありて小男兒女配匹の姪也  
といひ又葦不合尊の侍嬢とて志くも継母とてまゝにむね娘と娶  
りて此とありていといひに餘伊特諾伊特丹の二神水蛭兒と生るは  
三歳なるまを御たすて流してしといひ伊特丹神火の神を

産まふ時多神ありといひ伊特諾の神み何の其子とせりて既して  
なりといひといひ素戔嗚鳥神父の神と逐き出されしは中さむといひ  
よりといひと天照大神軍紀にて西せられといひ終すべしといひの類父子  
兄弟の事といひ其倫の西しき西をいひといひは足らずといひの細い舊事  
古事出の記日本記善其記みえといひをいひ其説の事なり  
かのづくといひといひや讀まらるる思ひを致すへき事也

正徳六年丙申三月上漸

筑後守從五位下源朝臣君美題



凡例

一 凡此書は先代舊事本紀古事記日本書紀および  
 而を通し考て其義長ずる不<sub>レ</sub>據りて其要を撮りて掲<sub>カ</sub>  
 書し其文辭の解釋せざるをは各條の下に依書して  
 これを注し其注の解釋せざるは細書して分注す  
 け<sub>レ</sub>其通を以て名<sub>レ</sub>ばくするハ舊事古事本の記日本紀と<sub>レ</sub>の書  
 名通して多<sub>ク</sub>の義あり今<sub>レ</sub>字を借用し<sub>レ</sub>而古語より<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>て  
 釋するの義あり今<sub>レ</sub>言を以て古言と通ずるの義あり俗言と  
 以て雅言と通ずるの義あり其義多し

一 凡撮要注釋其説の校点不<sub>レ</sub>或ハ名<sub>レ</sub>説の初<sub>レ</sub>其書  
 名を注し或ハ名<sub>レ</sub>説の下に分注す是ハ苟<sub>カ</sub>臆<sub>レ</sub>統<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>凡  
 皆援據あるを<sub>レ</sub>據り<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>其説の出<sub>ル</sub>所を以<sub>テ</sub>し  
 して其書を<sub>レ</sub>候せ考<sub>ル</sub>るに便あるべき<sub>レ</sub>の也



一 凡 舊事本記 日本書紀 記述ありしもの其説の異あり  
り其義長ぜし一説に授りて或は其説の疑りしき  
或ハ其文の長き要するに大義の存するものありざる  
とばそのを去るべし然れハ多岐ニ其半と<sup>ウケテ</sup>七を<sup>ウケテ</sup>七を  
心まかぬや

一 此書は傳ふ其義を我國の古言とせめて假用ゆる  
所の今字を<sup>カ</sup>掛りて<sup>シ</sup>今字と<sup>リ</sup>即今漢字<sup>ト</sup>此なり  
古人我國の語言を解釋せし所のものありし人の  
なづ限りハ尋究むるもありき然れとも神名神  
號ありしもの<sup>ハ</sup>日本書紀<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>し<sup>ハ</sup>あり  
授りて<sup>シ</sup>記<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>これハ日本書紀ありしもの<sup>ハ</sup>世<sup>ニ</sup>傳<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>

習熟する不あるが故也但し注釋の文ハ多くハ古事記ニ  
みえしものありしが古事記ハ俗よりその名假  
名乃注を用ひて古俗の語言を記せし事ども多し前  
よりその其義を語言のみに求る事ハ其益多きが故  
あり況や今此書の作俗よりその假名の法を用ゆる不  
なれを古事記の書名假名のありしものを用ゆる不  
最多し

一 凡 引用ゆる所の舊事本記の従ふみえし神名神號  
ある古人の訓義おぼくざるは今ま<sup>ニ</sup>傍<sup>ニ</sup>列<sup>ス</sup>を加ふるに  
及ぶれし其疑ひを<sup>ハ</sup>明<sup>ク</sup>が<sup>ハ</sup>故<sup>也</sup>  
一 凡 此書古く舊事本記古事記日本書紀とて本據



とすとりども或ハ名教のあける或ハ事実のあける別するに  
義を以てせしむる事と均登かざるにむして其説と注に  
附書すこれハ事既ハ僭踰ヲ涉るとりども敬て其罪と  
遊く登るざる所あるが故也

一 凡 他家此書をのり其説となす者すく然かれば新して  
異書 秘籍とありしを多し其色を舊事本記在事  
記日本書記ホも参考して其徴とす登きものなきは  
一切の採用はずこれハ古よりその著辞 異端徒の篇籍  
を継すが故也

一 凡 此書其義博くしていまは條暢なるに其事疑て  
いまは以辨ありて次て大方に識を賂をに是を

後生の惑を解き難かしくハ別ニ或問を作りて擬對す  
これハ蔓説を挿注する時其端多く文長く觀に便な  
ざるを恐るゝ故也

正徳六年丙申三月上澣

筑後守從五位下源朝臣君美題







下よき事一ぬ候也  
按ず候事一也

● 神とは人也我國の俗凡其言ふ所の人を稱して加美と  
し右今の語を同トある言尚の義と用えり今字と  
併用するにむして神とある一上とあるす所の別ハある  
しり言とは舊説子美許登トハ程ヲ如レ言御事ト也ト  
又之私記まゝ吾國尊其人則言神事ト也とも云へり纂疏  
上古の俗凡其人を尊ては皆これを美許登と稱して  
君臣乃異稱あり一にハあるは此故に古事記ハ君  
臣とも今此字を併りて用ひしりき此を舊事記  
ハ至尊にハ言の字を併り用ひ其録ハ今の字を併り  
用ひらき一うば日本記も其例ありしりき國

常五、言は古事記ハ國之常五とあるにハカセハ  
常國トコより多し一神事ト云ふがごとく又ハ國底ソコともナ  
せしは其故音の辨せしめを異義あるもあはれ世ノ  
あき相通を中寸義也後子後考  
辨ずるといふもの考これハ世ノ常國ハ即常世國也古の言  
新治國筑波國次城國仲國久自國高國ホの地す  
べてこれを常世國と云ひ又ハ日高見國ともいひ一也  
今此常陸國即此也此國ハ日神のまゝひ一地なるが  
故に日之國ともいひ一よりてまゝ衣手漬國コトモともいふ  
事もありしと見えしり其後今字を撰び併り用ひらみ  
及ひて常陸國とある寸これハ乃政お望の郡郷境と  
お接する義也と云ふ舊事記日本記常陸國國クニ狭サツチ槌尊と  
風土記ハ是レ一にハ











此二柱の神ありて神をカミとせしむるたゞ燧人氏  
の鑽キリ木取ヒラ火ヒラ一奉此如く禮含文嘉風沙シヤ氏の妻メ海ウミ為  
陸チ事此如くに世本あをアヲ開ヒラき勢ツトメを成して其民を利  
せしむるありしにカミよまけむも知るべしカミ火戸之  
道ミチ言大苦カク迎言ムカヒ火戸ヒラ摩マ差大戸ヒラ摩マ非とも大戸  
乃大富トヨク道と申せしも其語音の傳せしるべしカミ禰ニ洗シ  
上古の民は巢カミ居りカミ穴アナ處たをカミ此村ムラめ始とを宅  
ありと之くカミとりぬカミ慕カミさカミげ又たさカミば軒カミ轅カミ氏カミの村  
始有堂カミ廬カミ一奉の如く披カミ山カミ通カミ道カミ一奉此如くカミ  
春秋内事史記其神功ありしるふりてかゝる神も  
あをカミしカミまカミしカミけるあやカミ大カミとカミハ其神功を大也とする

の稱ありしとカミしカミ所也道とカミしカミハ行路也カミ若ハ  
草カミ覆カミ屋也途とカミしカミハ家也カミ右カミ語カミをカミ色カミとカミりカミハ又ハ  
摩カミとカミりカミぬカミハ即苦也カミ度とカミりカミハカミ非カミとカミりカミハ上カミ古カミの俗男を稱  
して日子カミことカミりカミハ女を稱しカミ日カミ女カミとカミりカミハカミすカミるカミりカミちカミ男カミ女カミの  
美稱ありてカミ彦カミ姫カミハカミの字を假り用ひカミハ其字義り  
取カミりカミる也カミ彦カミ姫カミと稱するの義カミ面足カミ根カミハ神カミ舞カミ其  
義詳ありカミ故カミ舊カミ事カミ記カミハ此二柱の神の心事をカミ  
檀カミ城カミ根カミ言妹カミ言を檀城根カミ尊カミとカミるカミさまとカミ其カミ青  
檀城根カミ尊カミ又ハ沫カミ蕩カミ言カミとも又ハ面足カミともカミやすカミ言  
を檀城尊カミ又ハ檀根カミ尊カミとも又ハ政カミ宿カミ非カミ言カミとも  
申すとカミ注カミせカミしカミきカミ物カミを日本記カミにカミかくカミるカミは















してこれより上つゝ此世の事に及ばざりし其  
疑を咽し而也と云くは猶れども神七代と云  
るハ舊事紀古事紀日本紀ホに足えし不皆同ド  
られ上世より言嗣し事ありしハ云くは  
天一神七代地神七代より多し云くはけ出の國史  
よ足えし而もあはれ但し舊事紀子天神地祇  
亦此本記を志るされしとも其天神本記は忍  
慈根瓊々杵木の言れ事事を志るされしハ二神ハ世  
地祇ハ世地祇本記ハ素戔嗚尊大己貴木の神  
の事事を志るされたり云くは天神七代地神  
五代より多し云くは後人の附會ハ出し不決して疑ハ

危かき信ずるはたす

亦天地初て割判し時高天原ニ成神の名天  
御中至尊可美葦原彥尊ニヤ寸二柱の神  
わしき其次をば天八下言し其次をば天  
三降尊と申し其次をば天合尊ニヤ又ハ天鏡  
尊とも中次をば天八百日尊ニヤ其次をば  
天八十萬魂尊ニヤ其次ハ高皇產靈尊  
神皇產靈尊津速魂尊木の神ハ一  
天御中言の尊の後九六世より高皇產靈尊ニヤ其  
霧國後日國使務尊と申しを志るされし其次ハ天御中言可美葦  
原彥尊を志るされし其次ハ日本紀ハ舊事紀を本とし撰ハ云くは  
之れとも日本紀ハ天祖事と云くは志るされし其次ハ古事紀ハ天祖事ハ云くは  
此ハ今云くは志るされし又古事紀ハ高天原ニ成神の名天之御中言











八百日天八十美、鬼木の神、號亦これ其義、詳々  
高皇產靈、古事紀ハ高市產巢日ノ神ト  
あるせり此神ハ古ノ高、亦之、多、ひ、り、り、其國ハ  
即今常陸國多珂、那ノ地、これ也、皇ノ字、續、て、美、  
リ、事、御、ノ、字、を、續、メ、語、ヲ、同、ト、産、靈、續、て、武、須、毗、  
ト、リ、記注古語ニ武須毗、シリ、ヒ、ハ、尊、親、ノ、義、ト、云、之、  
皇親神トモ皇睦神トモ又ハ延喜式古語拾遺ニ、  
此神ノ事、事、を、申、す、也、舊事紀高皇產靈、又ハ、  
世ノミ、たり、鬼、ノ、字、續、て、多、末、ト、リ、ハ、  
あるせり、多、リ、今字、を、借、り、て、多、末、ト、リ、  
異、多、末、ト、リ、今字、を、借、り、て、多、末、ト、リ、  
又ハ、高、皇、今字、を、借、り、て、多、末、ト、リ、  
又ハ、高、皇、今字、を、借、り、て、多、末、ト、リ、

● 神皇產靈、尊上古の俗其人を多びて加美と云ハ

よのつきの事也此神をかく稱しけるハ地名よと云ハ  
るや常陸國多珂那ニ加美ト云ハ郷ある也津速意乃神  
號其義詳あるす登之、  
君たり、  
又其、  
中、  
ある、

大ニ天神伊弉諾尊伊弉冉尊二柱の神ニ  
修理固成り、  
賜、  
賜、







古事記のよきあるせしむらひぬらず其謂るべきあり  
多陀用幣流之國とりりる舊事記の豐葦原  
子五石秋瑞穂之地を寄賜ふとのみあるさうにて  
日本記に又之しりも又お同ト然るも古事記よ  
かくあるせしむらひぬらず其謂るべきあり  
りよの義と之しりる天の瓊矛日本記に瓊の玉也此  
曰努と注せしむらひぬらず古事記に天沼矛とあるせし  
其倭用ゆる所此字に瓊と沼との異あれとも續て  
努とするも玉と其後同ト然るも今あるも日本記  
に又之しりるも又志るす也私記に古者玉を謂て或ハ  
努と一貳と次しりるも又日本記の異本に努の字

貳の字もあつと之しりる此の義よりして後世に  
及びし又玉鉾などしりるあり九リ鉾の類と玉を  
以て稱するも舊説に瓊の美稱也必ず瓊  
玉之飾としりる又天神の瓊の矛を賜りて云依  
りてハ後世に將軍を命するも節刀を賜ふの  
義の如く也としりる天浮橋ハ天の字讀む河蘇  
り即海也浮橋ハ連舟至岸を以て也又天浮  
橋としりる連海之戦艦を以て之しりる即湖也  
浮袋はくハ舟を以て畫するの聲也然るをわ  
いひハ遊船基員としりる舟の名を以てわすべきたれ  
河也たとば歌詩と其の義あるが如しこれすなり



我國のちま也 古人の葦原の祠とも 源能基呂ハ舊事

記ハ礮馭廬と志る 日本記云ふより 倭用ゆ

不の字異あれとも其語ハ同ト自凝 としかがぬ

此語ハ即今淡路國西南乃隅 ふち 俗稱存其名

也ト松記云ハみえたり天之御柱を足立りトは舊事

記ハ天瓊弓を礮馭廬 礮 之上 ハ 國中之天柱

云々 と云ふハ 此事也天此字續 ハ 阿毎 としか

す ち 天也柱の字續 ハ 皷音羅 としか 古語

波 といひ ハ永きの義也 釋義集志羅 としか

標也永久の標 としか 九我國の俗知 ハ 地を

わり ハ 其標 を たり ハ 天瓊 ハ 梓尊 ハ 天瓊

ま ハ 時 ハ 建 ラ れ ハ 今 ハ 至 テ 日向國 云々

後 ハ 峯 ハ 形 ハ 現 ハ 存 ス 又神功皇后新羅を征 ハ 多 シ

一 ハ 其國王降伏 ハ 杖 ヲ 於新羅 云々

為 ハ 凌葉之標 としか 此義也 神功皇后 殿 ハ 八 ハ

神 ハ 世 ハ 尊 ハ 之 ハ 數 也 とい ハ ぬ ハ 尋 ハ 讀 ハ 比 ハ 呂 としか 殿 ハ

字 讀 美阿良可 としか 八尺也 云々

八尺 ハ 八角 ハ 遠 レ 殿 也 とい ハ ぬ ハ 代 ハ

制 ハ 説 也 九我國 ハ 俗 ハ あり ハ 展 テ 物 ハ 長 短

を 量 る ハ 比 ハ 呂 としか 八尺 ハ とい ハ ぬ ハ 尋 ハ

謂 ハ あり ハ 經 始 としか あり ハ

國 ハ ち ハ 生 成 ス ハ ち ハ 地 ハ 開 拓 としか あり ハ



舊説コウセツニ九ク生シとリ事コトハ造ツクるヲもシ生シとリハ出現イデマシをも  
生シとリハ不ム必ズ生シ産マ之ノ義ヲとリハ暴ハ此ノ後ニ倭ノ特ニ諸ノ尊ヲ此  
倭ノ特ニ母ノ者ヲ吾トとシ由リとシ所ニ作ル之ノ國ヲりマスノ作リ竟スルノと  
のノまハいハとシ又モ此ノ義ト相ト同ト美ノ斗ニ能ク祿ヲ具ス  
波ハ比ハ舊ノ事ニ紀ス日本ノ記ニ共ニ或ハ達ノ合トもモ志スルノ一ニ  
或ハ共ニ為ス丈ノ始トもモ志スルノ一ニ男ノ女ノ交ハ會スルノ義ト也ニ  
此ノ一ニ也ニ心得ラれズ此ハ二柱ノ神ヲおハ約スルノ事ニ  
をノくハわクちハひキ為スマセ一ニ御ノ軍ヲをカルノこトニ  
於テあハひテ一ツみセんト乃チたまハひハるヲたシ足ニ仲ノカ  
彦ノ天皇ノ仲ノ天ノ皇ノ序ノ事也熊ノ襲ノ國ヲを討ムハむトしムハハり  
一ニ紀ノ倭ノの徳勤ノ津ノより穴門ノ一ニ幸スルノ事ニ也一

皇后ハ爾鹿ノの筈飯ヲ津ノより一と穴門ニ達シ多クと  
約スルノ事ニ此ハ如クもシ一ニを上衣ノ朴ノ酒ニ俗カルノハ  
傳ハ一ニもシ皇ノ后ハ非ニ切ニ皇ノ后也紀ノ倭ノハ今ノ紀倭ノ國ノ爾  
阿ノ那トハ事ノの甚切ナル皆ハ阿ノ那ト稱スルノ事ニ也一檢ノ遺ノ事  
迹ニ夜ニ志ニ愛ハ其ノ義ヲ不レ詳ニ日本ノ記ニ注ス乃チ一ニ書ルハ舊ノ事  
事ニ記スルノ事ニ也一妍ニ哉ト志スルノ事ニ也一阿ノ那ニ而シ夜ニ續ス  
可レ愛スとシ志スルノ事ニ也一哀ニとシ續スとシ注スセラレル事ニ也一舊ノ説ニ  
悦ニ言ス也ト釋ス一ニたシ皇ノ慕ス哀ニ登ル古ノ哀ニ登ル賣ル舊ノ事  
事ニ記ス日本ノ記ニハ少ク男ノ女ノとシ志スルノ事ニ也一下ノ表ノの  
字ハ語ヲ辭ト見タシ皇ノ塔ニてシを志スル事ニ也一久ク美ク度ク迹ニ真ニ  
ハ其ノ義ヲ又モ不レ詳ニ日本ノ記ニ注スルノ事ニ也一於テ奇ニ産ル為ス起ル



志家されしを私紀の奇戸ハ候忽然也と釋し  
これ古語の久美度といひハ候今たちまちと  
といふことを此おとくあるや氷蛭子舊事紀に見え  
しおもあるやあるすが如くにしては後二柱乃神  
日神月神素戔嗚尊を生多ひ一次に又蛭子を  
生多ひ一に三歳あるを脚ををまかり初二柱の  
神巡柱の時臨神先川言を發し多ひ一事此  
臨臨の理の邊ぬきば此友の初終は見を生多ひ冬  
あるやれらう所は蛭子と申せし一子二柱たそし  
たるや物々に古事紀の國土を生多ひむとて宮  
初二柱子を生多ひしといふ見えし一事あるやすが

如く日本紀の八日神月の神を生給ひ一次に蛭子を  
生多ひ其次に素戔嗚尊ハ生多ひしと見えたるはづ  
此と徴とす生多ひしと。此の事上右に俗言翻き  
滑り翻きしに於て盡く信ぶるやたはは強て其説を  
たぐるをくは淡嶋ハ日本紀に淡洲とある  
さる其地未詳梅むる日本紀の一書に淡洲  
淡洲とあるは文ありきは淡洲といふ淡路洲  
よある所の地名と見えしと

●此一節ハ天神伊弉諾伊弉冉の神の依すに葦  
原の地を証す事也以て一多ひ一が二柱乃神伊弉  
を証すて海より一西より一橋より多ひ一



初より其神速に勤めぬども終るに自ら来るに  
りぬバ天神所賜の寶を建て其地を得るに  
事の標に二柱の神ありてありてあを南北の  
地を詢む事をお議りて男神ハみけわ左軍に  
おと一女神ハ右軍にわたるにめて此神を行廻り  
て其軍地合せて進み戦ひむと約しきく右軍  
節度を交ずると怪て進て先づ一左軍後れ  
期を失ふに柱神行遇ひふ事と成むに  
うともすむに前後相接し其戦利ありてとけ  
かよき海の民を虜略し海中に一小舟を泊る  
のこあそし其虜略せしものよを放還し

其のつらや神を棄てつら其兵を引て高天  
原に還りたりとりぬ事のごとく  
天神布斗麻途と相を女先をいして不良亦  
還り降りて言を改めよと詔しきくは還り降りて  
その天の御柱を建廻りて先のことしきくおいて伊弉  
諾言先阿那途夜志愛衣登賣衣と云ひ妹伊弉  
冉言婚し阿那途夜志愛衣登賣衣と云ひ妹伊弉  
御合て御子淡路の穂之枝別神を生み次に伊弉  
二名洲を生む神の身一とて面田あり毎面名  
あを伊弉を愛止比賣とけい讚岐國を飯依比古  
こりい粟國を大宜都比賣とけい土左國を建依別



こりよ次子隠岐北三子ノ傳を生む亦名ハ天ノ忍許  
別次子筑紫傳を生む此傳も又少一ツとして面四ツ有り  
毎面ヨ名有り筑紫國を白日別とリハ豊豆國を豐日  
別とリハ肥國を速日別とリハ日向國を豐久士比波別  
とリハ熊曾國を建日別とリハ舊事記に云ク佐波傳と云セ  
傳を生れとも由と云セ也熊曾の次子伊岐傳を生む亦  
名ハ天比登越柱とリ次子津傳を生む亦名ハ天之  
授手依比賣とリ次子大倭豐秋津傳を生む亦名ハ  
天津虛空豐秋津根別とリ此八傳ハ先子而生あり  
ありて大八傳國とリかして後子還り坐し時子昔傳  
見傳を生む亦名ハ建日方別とリ次子小豆傳を生む

亦名ハ大野手比賣とリ次子大傳を生む亦名ハ大  
麻流別とリ次子女傳を生む亦名ハ天一根とリ次子  
知珂傳を生む亦名ハ天之忍男とリ次子女見傳を  
生む亦名ハ天女座とリ九十四傳を生む其處に此  
傳ハ皆是水沫凝て成れ依との也此處舊事記古事記  
ありて云ク  
●布斗麻迹ハ舊事記に大石此字城傾刃ら依日本  
記にれよ同ト私記に上古の時ハ急トをば用ひむト  
にハ麻の肩骨を用ふこれを布斗麻迹とリよと見え  
る舊事記古事記に天香山之真牡鹿之肩骨を  
肉抜て天香山之天波々迦を取りて石川むと見え  
此也天香山ハ山名波々迦ハ木の名也類聚傳名カハ本草に  
櫻桃一名ハ紫櫻云々云々は波々迦と見えり



又龜卜ハ皇孫天降す時より略さるるこりハ釋日本記  
或ハ龜の甲をやきて占ふ事ハ奥の夷のせし事とも  
いぬ也奥義抄淡路とは舊事紀に先ツ淡路洲を生みて  
胞とす意新不岐が故ニ淡路洲とすふをち謂ふ吾  
恥也と見えたる日本記亦これよりして志るさるるき  
舊記に初ハ必るに弥子を生むと思ひぬいし今  
おもとざる外に以て愚子を生むいしが故ニ吾恥也と  
名付られしハ此記記初此記いくあるなき初めハ淡路  
こいひしを今改め淡路洲と名付られしやこれ  
甚初ハ此地を保り事をほすしと棄られし而もこれ  
吾恥也と見えたることまひしも知る處に日本記

注の一書に先以淡路洲、淡路洲為胞と見え此時  
南に此島を生れしハ是れ又胞とすこり事も  
いぬは初に棄てふ此例例よきはこり事此あるよ  
うりて也穂之狭別狭別とは其島神の名也伊豫二名  
之洲とけ今此伊豫領波土佐阿波お此四國の地と  
総稱せし名あり也二名の洲といふ事其義不詳  
初記より古の時よいまこれらの國名ありしは  
あはれ史書撰述の時の名よりして名付られし也  
又凡國名義未詳先儒も説を傳はずと見えたる  
凡國名義不詳身一として面曰つあるは一島の地勢  
其群一面わのづつと別水あり伊豫とて



其地西南北地乃古の伊奈國久味國小市國怒麻  
國風速國乃地今の伊豫國即此也アトヒメ止比賣トヒメは  
其國神の名也讚伎國ハ其西北の地乃即今の讚伎  
國此也飯依比古ハ其國神の名也粟國ハ其東北  
地乃古の粟國長國ハ其地即今北河波國此也大直  
都比賣ハ其國神の名也土左國ハ其東南の地方  
古の都佐國波多國ハ其地即今の土佐國也速依  
別ハ其國神の名也凡其西神の名比賣ヒメとリハ  
女子メと稱比古ヒコとリハ男子ヲと稱古の俗男子と稱して別とリハハ  
集釋後比賣ヒメは古の倭國ハ古の意伎國ハ古の意伎國  
即今北河波國とリハ三子傳の義不詳天之忍許

呂別ハ其國神の名也筑紫國ハ今西海九國の  
地を總稱せし名也筑紫國ハ古北筑志國竺紫米  
多國ハ其地今の筑前筑後ハ其國即此也白日別ハ  
其西神の名なり豐國ハ古の豐國宇佐國國前  
國比多國ハ其地即今の豐前豐後ハ其國此也  
豐日別ハ其國神の名也肥前ハ古の火國松津ツ水  
末羅ウ小阿蘇國葦ア分國天草國ハ其地即今の肥  
前肥後ハ其國此也速日別ハ其國神の名也日向ハ  
即今の日向大隅薩摩ハ其地豐久士比ヒ別ハ其  
國神の名也熊野國舊事ハ其熊襲國クマシロと云ふ事  
私記ニ據リ日向國嘯フ嘯フ之地即此也建日別ハ



其國神の名也 熊襲の字肥後筑前等の國風土記の傳名抄に  
大隅伊岐<sup>イキ</sup>伊弉<sup>イサ</sup>倭<sup>ヤマト</sup>古の伊弉<sup>イサ</sup>倭<sup>ヤマト</sup>即今此是倭國也  
天比賣<sup>アマヒメ</sup>部<sup>ベ</sup>柱<sup>ハシラ</sup>其倭神の名也津<sup>ツ</sup>嶋<sup>シマ</sup>古の津<sup>ツ</sup>嶋<sup>シマ</sup>縣  
即今の對馬國也天之<sup>アメノ</sup>媛<sup>ヒメ</sup>依<sup>ヨリ</sup>比賣<sup>ヒメ</sup>其島神の  
名也大倭<sup>オホヤマト</sup>豐秋<sup>トヨアキ</sup>津<sup>ツ</sup>洲<sup>シマ</sup>古の代々其地を割き其  
地を併せて國郡を置れし事其<sup>エニ</sup>沿<sup>ユイ</sup>革<sup>カク</sup>同<sup>ドウ</sup>ト<sup>ト</sup>か<sup>カ</sup>ず  
す<sup>ス</sup>今<sup>イマ</sup>の<sup>ノ</sup>我<sup>ガ</sup>内<sup>ウチ</sup>東<sup>トウ</sup>海<sup>カイ</sup>東<sup>トウ</sup>山<sup>サン</sup>北<sup>キョウ</sup>陸<sup>リク</sup>山<sup>サン</sup>陽<sup>ヤウ</sup>亦<sup>モト</sup>の<sup>ノ</sup>地<sup>チ</sup>此<sup>コノ</sup>也  
天<sup>アメ</sup>御<sup>ミ</sup>慮<sup>リョ</sup>空<sup>ウツ</sup>豐<sup>トヨ</sup>秋<sup>アキ</sup>津<sup>ツ</sup>根<sup>ネ</sup>別<sup>ワケ</sup>こ<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>ハ國<sup>クニ</sup>神<sup>カミ</sup>の名<sup>ナ</sup>を<sup>ヲ</sup>稱<sup>ナヅケ</sup>  
ず<sup>ズ</sup>に<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>た<sup>レ</sup>れ<sup>ド</sup>も<sup>モ</sup>詳<sup>サツ</sup>なる<sup>事</sup>は<sup>ハ</sup>古<sup>コ</sup>より<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>れ<sup>タ</sup>り<sup>シ</sup>也  
古<sup>コ</sup>倭<sup>ヤマト</sup>ハ古<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>吉<sup>キチ</sup>備<sup>ヒ</sup>中<sup>ナカ</sup>縣<sup>ケン</sup>國<sup>クニ</sup>穴<sup>アナ</sup>國<sup>クニ</sup>風<sup>フウ</sup>治<sup>チ</sup>國<sup>クニ</sup>等<sup>トウ</sup>此<sup>コノ</sup>地<sup>チ</sup>即<sup>ス</sup>今<sup>イマ</sup>  
の<sup>ノ</sup>備<sup>ヒ</sup>前<sup>マエ</sup>備<sup>ヒ</sup>中<sup>ナカ</sup>備<sup>ヒ</sup>後<sup>ノチ</sup>等<sup>トウ</sup>國<sup>クニ</sup>也<sup>ナリ</sup>見<sup>ミ</sup>嶋<sup>シマ</sup>山<sup>サン</sup>豆<sup>マメ</sup>嶋<sup>シマ</sup>亦<sup>モト</sup>は<sup>ハ</sup>備<sup>ヒ</sup>前<sup>マエ</sup>

國の海中にあり知珂嶋ハ舊事記ハ血<sup>チ</sup>廉<sup>レン</sup>嶋<sup>シマ</sup>と云ふ  
たり<sup>リ</sup>此<sup>コノ</sup>嶋<sup>シマ</sup>肥<sup>ヒ</sup>前<sup>マエ</sup>國<sup>クニ</sup>松<sup>マツ</sup>浦<sup>ウラ</sup>中<sup>ナカ</sup>值<sup>チ</sup>嘉<sup>カ</sup>郷<sup>キョウ</sup>一<sup>イチ</sup>石<sup>シヨク</sup>餘<sup>ヨリ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ミチ</sup>嶋<sup>シマ</sup>  
あり<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>もの<sup>ノ</sup>即<sup>ス</sup>此<sup>コノ</sup>嶋<sup>シマ</sup>也<sup>ナリ</sup> 肥前國風土記此<sup>コノ</sup>餘<sup>ヨリ</sup>ハ即<sup>ス</sup>今<sup>イマ</sup>不<sup>フ</sup>在<sup>ゾウ</sup>の<sup>ノ</sup>  
海<sup>ウミ</sup>嶋<sup>シマ</sup>と<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>同<sup>ジ</sup>き<sup>キ</sup>あれ<sup>ド</sup>も<sup>モ</sup>古<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>對<sup>タイ</sup>し<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>れ<sup>タ</sup>り<sup>シ</sup>也  
詳<sup>サツ</sup>なる<sup>事</sup>は<sup>ハ</sup>建<sup>ケン</sup>日<sup>ニチ</sup>方<sup>ホウ</sup>別<sup>ワケ</sup>大<sup>ダイ</sup>野<sup>ノ</sup>子<sup>コ</sup>比<sup>ヒ</sup>賣<sup>メ</sup>ハ皆<sup>ミナ</sup>是<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>倭<sup>ヤマト</sup>神<sup>カミ</sup>の<sup>ノ</sup>  
名<sup>ナ</sup>也<sup>ナリ</sup> ●此<sup>コノ</sup>一<sup>イチ</sup>節<sup>セツ</sup>ハ天<sup>アメ</sup>神<sup>カミ</sup>を<sup>ヲ</sup>占<sup>シ</sup>よ<sup>ウ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>征<sup>セイ</sup>我<sup>ガ</sup>の<sup>ノ</sup>利<sup>リ</sup>ハ  
我<sup>ガ</sup>軍<sup>イクサ</sup>此<sup>コノ</sup>お<sup>ノ</sup>私<sup>シ</sup>に<sup>ニ</sup>ある<sup>事</sup>を<sup>ヲ</sup>男<sup>オトコ</sup>女<sup>メウメ</sup>の<sup>ノ</sup>神<sup>カミ</sup>に<sup>ニ</sup>告<sup>ツケ</sup>テ<sup>テ</sup>戒<sup>イハ</sup>め<sup>メ</sup>賜<sup>タマ</sup>  
ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>バ<sup>バ</sup>二<sup>ニ</sup>粒<sup>リツ</sup>の<sup>ノ</sup>神<sup>カミ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と<sup>ト</sup>共<sup>ニ</sup>涉<sup>セツ</sup>軍<sup>イクサ</sup>攻<sup>ク</sup>む<sup>コト</sup>を<sup>ヲ</sup>天<sup>アメ</sup>  
降<sup>クダ</sup>す<sup>コト</sup>と<sup>シ</sup>初<sup>ハジメ</sup>と<sup>シ</sup>得<sup>エ</sup>た<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>淡<sup>タン</sup>洲<sup>シュ</sup>又<sup>マタ</sup>授<sup>ウケ</sup>り<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>西<sup>セイ</sup>南<sup>ナン</sup>北<sup>ペク</sup>  
の<sup>ノ</sup>處<sup>トコロ</sup>を<sup>ヲ</sup>征<sup>セイ</sup>さ<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>國<sup>クニ</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>服<sup>フク</sup>せ<sup>シ</sup>事<sup>コト</sup>其<sup>ノ</sup>父<sup>チチ</sup>母<sup>ハハ</sup>  
を<sup>ヲ</sup>拘<sup>カウ</sup>す<sup>コト</sup>と<sup>シ</sup>ぬ<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>其<sup>ノ</sup>玉<sup>タマ</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>モ</sup>て<sup>テ</sup>國<sup>クニ</sup>人<sup>ヒト</sup>に<sup>ニ</sup>依<sup>ヨ</sup>り<sup>シ</sup>



ゆふ事もよの如くゆふと其故と更めまへし事と  
大八洲の國を生成まへしは言嗣一あり一凡大  
八洲の國を生成まへし一此等舊事一古事等の記  
又えし一而ハ同ト日本記みえし一而ハ淡路洲と  
肥土としてすれを大日本豊秋津洲を生子次  
伊豫次之能繁次之隠岐佐渡を生子次之越  
洲次大洲次之吉備子洲を生成まへし一凡大八洲  
國の辨起きしと云ふさるる又其注よ訂きし一  
流書の記も其次等皆々異同ありまへし一これハ  
上世より言嗣一而ハ同ト切つていふべし一  
きは是れを事を知し一これ其疑をばらばら

但一舊説ニ越洲ハ畿内ノ地トお連リテ別洲ト云  
登り一古事記ノ説を濁し一と次といぬ纂疏の越  
古高志國ニ國角廉國加賀我國江沼國能登國羽咋國伊彌頭國  
久比波國等地即今ノ越前越中越後加賀能登等ノ國是也  
今一古事記ニ云ふ一古事等此記を授り一也  
又日本記注ニ云えし一此説を按じ一凡大八洲の辨あり  
よより一八洲の故も合す登き一ために強て其説成  
作れし一見ゆ事ともありまへし一此大八洲と  
いひしと云ふ一八洲を尚城の義と云えし一を  
既一國を生成し終りて其後ハ海神名は大綿津見神  
水戸神名ハ速秋津日子神。味速秋津比賣神。凡  
十粒の神を生成し一其速秋津日子。速秋津比賣の



神。河海よりて持別て。風神名ハ志那於比古神。木  
神名ハ久々能智神。山神名ハ大山津又神。野神名ハ  
鹿野比賣神。亦名ハ野稚神等十二柱を生む其大  
山結又神野稚神。山野よりて持別て八柱の神を生む  
日本紀古語拾遺ありは男女二柱の神海川山を生まるると云々あり  
の始らむに舊事紀古事記より其神を生むると云々あり今ては舊  
事古事あり記よ  
よりて云々なり

●大綿津又神又ハ少彥命とも云々志那於比古  
神又ハ級長津彦命とも云々久々能智神又ハ  
句々廻地神とも云々大山津又神又ハ大山祇  
神とも云々也此等の神を生れしと云々事ハけホの  
神を祀らぬしる此時より始りて又其祀掌れば

穢をりうち命せしと云々云々海山野の神とハ河  
りふ也其祀掌せらる穢とハ河海山野等故記るべき  
と云々其穢を分て命せしと云々たとくは帝舜  
即位の初望于山川編于郡神と云々云々此如く  
書又祭祀以馭其神周禮太  
宰之職おどえ之しと云々其義  
同トからべき事なり

かくて伊弉諾伊弉册二柱の神共ヨ日神を生む  
尚ツホ大日靈貴ヒコニヤ此御子に授サツるに天上  
事を以て天之御柱を以て送りまふ次月神を  
生ツキこましき月讀ツキヨミ當と申す又ハ月夜又とも月弓  
とも申すこれ又日配ヒツクてまはるるべしとて天送アマユクり  
まはる家後ウチノノチ子素戔嗚尊を生むしと云々此神



天下を去るのらあべに物に常に哭泣はた  
まさこし青山は枯山の如く泣枯河海は泣  
乾うすたを以て悪神の音使蠅のごとくして  
萬物の妖吹凡此如くは皆考りき是舊事記日本紀古語拾遺等よりあたり

●日神とは日城ツツサなりまふ神也月神まふ此義も同く  
大日靈貴ハ讀て於保比屢咩能武智日本紀於保ハ  
即大也比屢咩ハ即日女也女子の尊稱也授く  
るに天上の事を以てすとは古事記ハ汝命は高天  
原を知らし事依賜ふと見えし是也天ノ御柱ハ  
初め二柱神天降りまはし時ハ天神の事依りぬ  
その天の瓊房也物も成日ノ神ハ附て還りまは

天神の事依り賜ふ其功すて成りぬる事成  
報ト告ケる義ありし月續月夜見ホの字成  
續む其語も同ト然るを倣用ゆふの字異なるハ  
其義も又異也と見えたる上古の俗ハ讀といひしは  
凡ッ物の数を加ふる事成りひきさうは月續とは  
日と一たび會して一月となり十二夜會して一年成  
ちたふよりてい月夜とは日と代りて夜と現を  
の義よれぬる也一月とは其語の傳せしこと  
又其象を取ていひし不ある也たとは上流ハ弦ハ弓成張  
れたる象なり望は其指滿  
の象ハ如く神の事ハ舊事記ハ滄海系湖北  
ハ百重を流しむし後ハ配日而知天事一所知



夜之食國也ヨルノヲホクニと見えたるが故に初めハ滄海系ソウカイケイの湖乃  
ハ万重城マンジュウと見えしとも後ハ日ニ配ツキて天上テンノウノ事と  
知り多し也滄海系之湖ハる重とは海上ウミノノ意  
遠き事故に不なる也今按多し其故コトを破ツク破ツクり  
月鏡ツキカガミの神社あり名神大社と見えし延喜式ハ海上  
ノ事故に治め多しハ故に其國ミコクノ其神跡ありし  
也又月神命ツキノカミは其故コト縣アタタマ至等ニ祖ソノなる由も見えたる  
は舊事キウジ其縣アタタマ至等ニ神ノの後ノチなるが故に其國ミコクノ  
つゞき祭れるも志るべし又舊事キウジ記キ日本ニ記キ注  
此神天照太神ニギハヤヒノミコトの詔ミコトノコトをうけて葦原中國アシハラニクニノ  
際サヘりて保食ホシ神ノの許ヨリみむり多しハ志るべし

これ海ノ配ツキ日ニて天事アメノコトを知り多しハ時トキのるなる也  
今も伊勢度會郡イセノタケノノ月鏡ツキカガミノ月夜ツキヨノ足ノ神社ノ等  
和ニそしマシと見えしハ延喜式志る也又配ツキ日ニと見え  
義ヨシふク尊ノ素戔スサノ尊ノハ舊事キウジ記キハ速素戔スサノ尊ノ  
尊ノと志るされ古事記コトワザハ建速タケハヤ須佐スサノノ男神ノと志る  
せり速ハヤと見え建タケと見え此神コノカミハ勇ハヤシと見え俾ツケくタと見え  
義ヨシなる也ハ神ノノ所ノ名ノ程ノ多しハ青山アヲヤマを泣ナク枯カラノ河  
海ウミを泣ナク乾カラカノハと見えハ生ナれナカクに其性コノサマシの光  
暴ヒコシカクと見えハ中ナカせシと見えハ狭ヒナ蠅ハ五月イツキ蠅ハ  
志るされ日本ニ續ツグて佐波倍サハハヒと見え夏月ナツツキの蒼蠅アヲハシの  
志るされと見えと見えハ常トコノ哭ナク泣ナクつツと見え



美加の妖皆發けりとりあまの尚書み丹朱北傲を  
はるを教くりて如くに此神の愚を極めよの義  
あり

其後伊弉冉の神火神軻遇突智を生むるを遂に  
神遊きりるを出雲國と伯耆國との界比波女山に  
葬まける又紀伊國熊野乃有馬村に葬まける俗に  
神意を結るる花月花時と云花祭るま鼓吹幡旗  
を用ひて歌舞して祭れりこれ舊事記古事記よりしてある事  
旧事記よりして神の神遊ませりてある事  
して原上舊事記古事記よりしてある事  
又元一不ぬぬかきまのころに其疑を問きしは舊事記古事記よりして  
あひし所事はある事候まき義に候はれりて今よりしては神の  
かくきゆせし事と葬まきりて地と地志るして舊事記古事記並  
其大要とけ下よ注す

●火神軻遇突智ハ又ハ火之燒速男命神又ハ火火  
燒炭神舊事記よりして又ハ火之燒比古神又ハ火之迦具  
土神又ハ火之產靈日本又火結神とりぬ延喜出雲國ハ  
下よ詳也伯耆國ハ古の波伯國即今伯耆國也比婆  
之山其處所未詳紀伊國ハ古に紀伊國熊野國等  
の地即今紀伊國也熊野ハ今年婁郡に屬す  
或後よ者る村に產田社とりあり即是伊弉冉尊  
神退りまに地也其東に隈穴イワヤありウケ立穴イワヤとも  
花穴イワヤともりぬ伊弉冉尊に葬まける事これ也舊事  
に繩とひて花又ハ幡カサとほり圓鏡一歌舞して  
祭る神世の遺俗也那智三伊弉冉尊神去り



ませし事舊事紀のそしあふる伊弉冉言大神と  
彦のふ及び其たの焼きて神去ます伊弉諾神  
其妹の神城子の一木を昂るふいと深く恨むいそ  
こけく争せる十柱飯を搦て大神の頭を斬て  
既くあねしき子其既こくく皆神とあきり  
又御刀の垂るし一の血も皆く神とあきりかくて妹の  
神とえ給えんとそ黄泉國に逃れ其殞歎之ま  
むりませし伊弉冉の神を我いけこし伊弉の如く  
其殿より出違ひしは若と汝と不化之國未作ま  
還りたるをいそくまいし悔くも来ます事此  
既かりく吾は黄泉火喫しぬ入り来まする畏し

志ふれし我つて黄泉神とお漏をむ我をそ  
又海しとどのまいと殿の内に入りたる甚久く  
待むびまいて左の御影若く挿るい湯洋の津若  
櫛の男柱を引かきて兼炬もいそ入るふいし  
宇土多加禮斗呂々破底其上八雷神化り辰  
水も又畏みてすみやうと逃還りたる及び妹の  
神其又辱しめたるを恨む若く黄泉醜女と  
追こめ又其八雷神の子五方の黄泉軍副て追  
しめこめいそも追来りすふそも子引の石と  
黄泉比良坂より引塞む其石を中に置て對立し  
ばおよ事すを度る此伊弉冉神愛我那勢







蟲也多加禮ハ聚ちを計呂ハ岐ハ爛壞するの貌也ハ雷神とハ雷神八部あり也  
其名も舊事本古事本の記に詳也英泉津醜女隣志許賣とリぬ古語志許とハ兄  
よき子をよきと云ふ舊事記に醜女の字を假用ひられたる地下の醜女と云ふ是  
私記に今世人の児ををこむと云ふ事神女と云ふハけ法の祀り也と兄之たり英泉軍  
とは地下の鬼兵と云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大  
なる所あり石今ハ信濃國飯沼郡とありと神代を扱ひ兄曰いふ事古事本に  
心泊るまは英泉比良坂ハ私記に古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大  
ありと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
妻之誓ある事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
上古の俗事本と稱する事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
五石を成り立むと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
相同小伊賦夜坂はその處に古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
賦夜坂を引ぬと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
新絶と云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
とは兄之たりと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
は名を引くと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
小門の阿波波系とは英泉比良坂ハ私記に古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
日向國諸縣郡にも其神跡ありと云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
化と云ふ事古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事

九、伊特丹の神火神の

たぬの神避まゝ一節心得ぬ事古也上世より  
云嗣一事よかゝる類多し盡く信ずる事古也  
疑を闕なくうけ志く産かゞ次此神を葬る事古也地も相  
傳ふ家不異ある事古私記に神道不測其  
實不測已異と云ふ事古又異は是如英帝之家  
處を不定也と云ふ事古初ハ神避ませ地  
つきて出雲國と伯耆國との界に葬る事古也後改めし  
紀伊國熊野遷一葬る事古也筑紫日向國  
ある神代に三陵を造り山城高野郡田邑陵の  
南原に葬られし事古也此如古事本に引く石ハ千人を引く能居石也其石の格大ありと云ふ事  
天皇初穴門國豐浦高野殯欽志事古也







祝と志らされたり舊事記日本紀に及べし而は上世より玄嗣一不同トカゞれば其疑を傳へしるの義あり之しけふの事すてよかくの如し其餘の事をも盡く論ずるよしと云

伊弉諾神功イサノカミ歿シ至り徳も又大也天アマ登ノボりて報ウケ

命ミコトしるひ日之少宮ヒノコミヤに留り宅ウチまふ又幽宮カクレノミヤ地淡路

洲シマに據りて長限ナガカゲまゝぬこれ舊事記日本紀よりと云すわらうた事記ふはけ大神の長限もませしとの事ハ之ヲ

功イサノカミありよの拳コブ等トと讀ミ徳トクありまひ伊弉保比イサノホヒと讀む

りふ功イサノカミの字ナリありつゝい讀ミて伊佐袁斯イサノサヱといふ舊事記

日本記ニッポンキあり此神の事コトを功疑イサノカミと云りぬとも又神

功疑イサノカミと云イハぬとも是コトいふれば伊佐奈岐イサノナギと歸カヘし

まゝとせしといふ伊佐袁斯イサノサヱたをいふとせしといふ

に似し報命イサノサヱとは空初ウツクハと天神の命ミコトノミコトを以て事

依ヨり賜タマひし事コト此其功疑イサノカミ事コトを報ウケしやといふ

とありあり少宮コトミヤ讀ミで倭ヤマト柯カ美野ミノといふと見えし記日本

日ヒ少宮コトミヤ其處コト不レ詳シ天アマの登ノボりてあり恒トコませしと

見えしとれば其處コト不レ此高タカ天アマ原ハラとありし疑ウタガハシ不レた

幽宮カクレノミヤに加久カク禮レ能ノ美野ミノと讀むといふ淡路洲ウツノシマハ新ニ

此洲コトシマハ空初ウツクハに生ナかすといふしありれば終ハシりぬも又原ハラ

といふといふ終ハシぬを同ドウくといふあり義也イハレといふ

延喜神名式ニギハヤヒノカミナマシに淡路國津ウツノミヤ名ナ郡ノ淡路伊佐奈岐

神社ノミヤ也ナリ即其幽宮カクレノミヤをいふといふ長ナガ限カゲはか



此を構ひ多ひし神退ませしうむりて其の舊  
ま川るの似るを

今れよりさき素戔嗚神年すてにたけて八握鬚  
心前よりあるは心常の啼泣て怒り恨む伊弉諾大神  
みこと此の何よりて事依せし國をばあはれを  
泣川とのあひし此乃國根の堅洲國よ孫らんとお  
かぬ泣川と養ふひくく大きに怒怒りて  
汝は此國を恨む心なりとのまひて神夜良比  
夜良比孫り此時父の大神の淡海より賀賀  
たりけるよはは天照大神を見ましめて後  
孫らむと清中されしよふりてみことのりて

これ舊事記在事記よりてあるすは日而記の神の暴悪より  
けるを以て父母二柱の神つおと遊りぬしとそしめは伊弉冉神  
いまは神退りぬるしとき  
事ありぬるを

八握鬚神の事とて其年の長し  
し孫の孫あり此神いふ事と怒り恨み多し  
り多し孫あり此の國よ孫むとむしと據て見る  
時は神母の神の事よりて父の大神と恨むる  
りし孫の事依せし國を志しむとては  
初此神は天に此事を云依し賜ひしと  
たりき此國ハ伊弉冉の神の所國也根の堅洲國  
ハすあち根國也堅洲國とて傍國とりぬる同ド  
かたし傍國ハ舊作  
天皇記に凡ハ舊説ハ根國ハ養泉此名也



地を以て由又えたり躰心得らるは根の堅洲國  
といふ雲國をさしりあ似るを伊勢系孫令  
彼國におもしませし事は彼國此風土記も足  
えり白根あどり即ちの古蹟よ山をば根とりひたり葉集抄よええり  
白根あどり即ちの上世の時も根國といひしは淡路山  
陽山陰の國としり古今の言同しかりしは  
不異あるありあはるは淡海の多賀ハ即今近江國  
大上郡多賀郷也まゝの田可とも多何とも云々  
せり延喜式に近江國大上郡多賀何神社と見え  
しはけ大神乃坐せし神跡也淡海乃字舊事  
記に淡路と見えしは傳寫乃誤りなり古事記

うは淡海と見えしは後長比は上古の蹟カサに逐カサ  
事とかりしは也

古史通卷之一終



古史通卷之二

かくて素戔嗚烏神天ノ昇リ坐して其惡事止む  
 時を以て物れとも天照大神愠怒王依根多乎卒々有於  
 汚心を相容りて惡服を以て坐し神衣を合織ふ時よ  
 其腋やの頂を穿て天斑馬を逆刺り刺て墜入天衣  
 織女見驚き機より墜て神去るもて大神天石在  
 戸開て刺許母理まにらよおめて高天原皆暗く  
 葦原中ノ國悉割くして常夜往き其神の聲授  
 嗚奈須満ち其姓とくく其名八万神憂  
 恙以て天安河原ノ神會に集ひて其祈謝する  
 座き方成儀り遂に大神を天之石をより其



すりよ及びてさる天系及葦原中國をのびりて照る  
明りありて事を得り八る等神共々議りて素戔嗚の  
神の千夜置戸を科せ稜具を賣て其罪を贖はめ  
遂神夜良比の夜良比き一節下の一節の通も日本記の  
其惡事止む時外一節の通も日本記の乃湯田の喜一節の通も日本記の放植埋  
溝數畔又重播一節の通も日本記の秋ハ刺串伏馬の類也波那知といふ  
植ハ渠槽也放とけられを廢る也埋溝遠美曾賣り一節の通も日本記の  
通ずる溝と土とを以て塞ぐ也數畔溝で砂波砂知といふ田畠を壞り野  
ちり重播溝で志波社岐といふ石敷をて種子を下す付其土瘠て穀  
實多るといふが刺串溝を久志佐志といふ田間を植を刺立てると禁て  
秋穀を一節の通も日本記の温恨より一節の通も日本記の久とハ古事記に於るに湯田の畔を  
放ち溝を埋らし一節の通も日本記の地矣阿多良斯登許  
曾為めけといふハ大嘗聞者一節の通も日本記の殿一節の通も日本記の原麻理教ら

さとしとハ酔て吐散登許曾為如此といひて乞賀  
米文ととみえとを地をたふさる地といふ地を指しむなり大嘗ハ日本記  
多財の象也と釋し一節の通も日本記の大嘗ハ溝で砂波砂知といふ田畠を壞り野  
神代巻抄にえいゆ吐ハ溝で砂波砂知といふ飲食の物を吐き置りし忌服をハ  
舊事記に齋服殿とあると云一節の通も日本記の神服を織る所の殿也と  
り由一節の通も日本記の天斑るハ麻也と云一節の通も日本記の馬を  
いぬたぐり逆刺とけ歎を殺しと後其皮を剥と云と  
又えと云纂疏の延喜式大坂の祝詞に放植放畔埋溝重播刺串  
天衣織女ハ舊事記に天照大神驚動多ハ後と  
もちて身を傷ひ多つりといふ一説に織女雅日姫を  
驚きと機より墮て體を傷ひと神去りますといふ其雅  
日姫尊ハ天照大神の妹也とあると云れき纂疏に今







高皇產靈神の思兼神ヲモカミノカミ思ヲモハ一めて常世の長鳴ナカナリ

命ミコトを集めて鳴ナカ一め 思兼神ヲモカミノカミの舊事コト死シよるル其思兼神ヲモカミノカミの神カミを兼カミ

信濃國阿智郡シノノクニアチノ郡等ナリが祖神ミコトノミコトありと云常世の國の名其説コト 天安河原の河上カハカミ

の天アマ堅石カタシタを取り天アマ金山カネヤマの鉄テツを取りて鍛カシ入イ天津アマノハ麻呂マロを

求めて石凝イシコリ姥命ヒメノミコトと科カて鏡カガミをヒくくもも天アマ金山カネヤマ其妻メケ不

不詳此神コトの事コトハハハも又云コト一者舊事コト記キハ初ハジメ天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

姥命ヒメノミコトと日ヒ像イミと鏡カガミをヒくくもも天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

天アマ香山カノヤマと洞ツツミと採ヒりて天アマ糠カヌカ神カヌカノカミとヒくくもも天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

天アマ香山カノヤマと洞ツツミと採ヒりて天アマ糠カヌカ神カヌカノカミとヒくくもも天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

天アマ香山カノヤマと洞ツツミと採ヒりて天アマ糠カヌカ神カヌカノカミとヒくくもも天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

天アマ香山カノヤマと洞ツツミと採ヒりて天アマ糠カヌカ神カヌカノカミとヒくくもも天アマ金山カネヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ

五百津御須麻流イハヤフツミコトスマナリをヒくくもも天アマ香山カノヤマの銅ドウを採ヒりて石凝イシコリ















後物を子に授けし後至て罪人をして其中よりかゝむを以て至戸とす也  
其の次に隨ふ物ありとて皆出づるなり也寸登き物なきが如く髪をぬき丸を  
ぬくもぬれるなりと名伊羅既に置戸とす所外には洞助也後代の解法に  
四座置心形置の名ありとす一東北縮を用ゆる神世の遺法也とす  
釋曰年記に授けし上曰至八座と稱する所曰と八とは神乃の尚ふ所の教  
なりと名伊又世人信しして己の丸をぬくは此其縁也と舊事記に伊  
素志鳥神逐れまひし時小森雨降れ青草成  
緒東て笠蓋とて宿を元神子とぬる神共子  
相まゝせしかば風雨甚しとすどもぬり休む事と  
得ずしと辛苦つ降りしを以後素志鳥神  
我今法神子逐れて永去むといふ事を我々  
命とわひ見えじして徑ふ去る人等と言ひ又天照  
廟一國を禊て天より上り流川天照大神其まゝ  
上り来りまは事成怪しとす此則流必に武備を

懐以て待問せしむ素志鳥神誓ひて然とす不善を  
懐て復上り来らば我今玉我齧て生む子みしを女を  
かゝらハ女をして葦原中國に降らしむと情んあは  
必しを男を生むかゝらハ男をして天上を去らしめ  
まゝゆ命此生給んも此誓言と同らむと云ひしは  
大神まはり帯せむ紐成切斷て生しむる不の神の名  
市杵比賣命次に天津比賣命次に田原比賣命  
九三柱の日女神まはすめでたき青志鳥神其誓言  
誓せしむる津所須麻流の瓊を齧て生しむる不の神の  
名正哉吾勝速日天之忍總耳尊次に天孫日命次に  
天津彦根命次に天津彦根命次に熯之速日命



次ニ熊野忍隅今凡六柱の日子神まにみよおめて  
素盞馬神我し更ニ上り来り居るを我神と處くよ  
根國を以て今まきに就去りなむとすといひ妙命と相  
見たまふとせずは終ニ離れま川原に忍ぶ事ありと  
此なりと云く上り来り居る今ハ又之ま川原に居る記をぬ  
左神の意此まよふれより永く死らむ妙命の  
天國照照一餘の事平安はしませ又我の清きん  
を以て生せる児等は妙命に奉るに云ひてはわら還り  
降りまに天照大神則彼六柱の日子神を取りて清  
ありて養ふと云一節此一節上の一節を以て日ヶ元注の一書より  
見之し初素盞馬神父の大神と逐れて天より下りて時天照大神と  
共ニ誓約ておのり居り居る其意事止まらばと云くは神と逐れ

多ひしとみえたる物を一書つ記し初素盞馬神天より下りて其  
して大神と逐れまは法上天より下りて時天照大神と共ニ誓約  
生れしと云くは況事理ありて是れ一節神共拒くと云下下に  
日本記に此一書ありはそれより以来世々此書地志に他人  
乃を肉より居るを諱と又東草を負つて他人の家内  
入るるを諱む是を祀すとの有れば必しを解除を科す  
これ古の遺俗也といふ事あり天を扇すといふと天  
地を勤まるといふが如く日本記に神天より昇る時  
溟海鼓き邊の山岳鳴り响ふこれ神性雄健きが  
然らむと云やといひし事ありは男と女を結ぶ  
の事也此神還りしより天の御如命又まに  
告中ければ天照大神我邪勢の上より放はす







ふさし〜とも見えたる其三柱の神の名も其次第も徳書に  
見え〜ふさし〜因ト加〜が神名式に筑前國宗像郡  
宗像神社之産と見え〜は此三柱の神也其申す所  
徳比賣、命ハ安藝國佐伯郡伊都伎徳神社と見え又これ  
也素戔嗚鳥神の生す所〜而も御須麻流の御城左の在り  
掌ウチコロと臂ヒタカキと足と上をきて生す〜のひ〜とも左右の掌ウチコロ  
とて生す〜とも見え〜其生り出〜不五柱とも六柱とも  
いひ其名も次第も徳書に見え〜ふさし〜異所あり  
舊事記に見え〜而も今や〜ある也〜也古事記に御記に撰  
速日命ハ見え〜其條を以て〜但〜日本記に記す〜  
●忍オシ根ネ耳ミミ、嘗の御事、押オシ根ネ耳ミミとも見え〜忍オシ根ネとも  
忍オシ骨ホネとも見え〜勝カツ速ハヤ日ヒ命ミコトとも吾勝オシカツ嘗とも〜

古語拾遺より大の嘗とて天照大神物忌部尊とて  
常トコ了ヲ御ミ坂ノ下ノにイ懐イひ〜右ミにイ祢ニしてイ祢ニ子ヲとイせ〜と  
見えたり〜其注〜今俗に推子と稱して  
早ハヤ能ニ命ミコトとも天アメ、菩ホ比ヒ命ミコトとも見え〜其注〜天アメ之ノ根ネ日ヒ命ミコトハ天アメ之ノ菩ホ  
等トコ此ノ祖ヲとて〜即是〜菅家〜天津彦根命ハ天津日子根命  
とも見え〜九ク河カ内チ直チ山ヤマ城シロ直チ等トコの祖也〜  
命ミコトとも慈野〜樺〜日ヒ命ミコトとも  
共トコ之ノ新ニ言コト紡フひ〜各トコ男女〜の神を生す〜と〜  
上古に俗言嗣〜不〜を盡〜信〜ずる〜  
焉〜神〜之ノ神〜のため〜逐〜北〜之ノ秋〜〜拒〜れ進〜退〜  
維〜谷〜り〜と〜つ〜の御子〜成〜質〜と〜



奉<sup>レ</sup>天照大神<sup>ヲ</sup>至<sup>シ</sup>も質子<sup>アリ</sup>りて其危難<sup>ヲ</sup>とす<sup>ル</sup>これん  
ため<sup>ニ</sup>高天原<sup>ニ</sup>還<sup>リ</sup>上<sup>リ</sup>りて<sup>ハ</sup>我<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>忍<sup>ビ</sup>ず<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>  
又<sup>ハ</sup>命<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>兄<sup>ト</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>せ<sup>し</sup>て<sup>ハ</sup>死<sup>ス</sup>む<sup>ハ</sup>忍<sup>ビ</sup>ず<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>  
天倫<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>な<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>汝<sup>ノ</sup>物<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>事<sup>也</sup>也<sup>ニ</sup>柱<sup>ノ</sup>女神<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>づ<sup>シ</sup>  
の神<sup>ノ</sup>子<sup>アリ</sup>質子<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>ル</sup>も<sup>古</sup>く<sup>も</sup>い<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>  
され<sup>バ</sup>洋<sup>々</sup>あ<sup>ら</sup>じ<sup>ば</sup>

△素戔嗚<sup>ノ</sup>神<sup>五</sup>十<sup>猛</sup>命<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>な<sup>き</sup>か<sup>て</sup>新羅<sup>國</sup>の<sup>天</sup>原<sup>ニ</sup>  
け地<sup>ニ</sup>居<sup>リ</sup>む<sup>事</sup>を<sup>レ</sup>祈<sup>グ</sup>い<sup>ハ</sup>治<sup>リ</sup>次<sup>ハ</sup>吾<sup>ノ</sup>國<sup>歟</sup>之<sup>川</sup>上<sup>ニ</sup>居<sup>ル</sup>  
峯<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>高志<sup>ノ</sup>八岐<sup>大</sup>蛇<sup>ヲ</sup>斬<sup>リ</sup>汝<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>宮<sup>ヲ</sup>居<sup>ル</sup>て<sup>ハ</sup>  
國<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>子<sup>柳</sup>名<sup>田</sup>比<sup>賣</sup>を<sup>レ</sup>む<sup>ル</sup>て<sup>ハ</sup>地<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>八<sup>咫</sup>士<sup>奴</sup>美<sup>ノ</sup>  
神<sup>等</sup>を<sup>レ</sup>生<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>汝<sup>ノ</sup>熊<sup>成</sup>峯<sup>ニ</sup>に<sup>坐</sup>して<sup>ハ</sup>は<sup>ら</sup>む<sup>根</sup>國<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>

入<sup>ル</sup>つ<sup>レ</sup>日<sup>ニ</sup> これ舊事記等よりてある事也

○五十猛<sup>命</sup>又<sup>ハ</sup>大<sup>屋</sup>彦<sup>神</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>舊</sup>事<sup>記</sup>の<sup>此</sup>神<sup>を</sup>首<sup>功</sup>  
之神<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>汝<sup>ノ</sup>素<sup>戔</sup>嗚<sup>鳥</sup>神<sup>ノ</sup>子<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>天<sup>原</sup>に<sup>居</sup>り<sup>し</sup>時<sup>ニ</sup>  
多<sup>ク</sup>ハ<sup>十</sup>種<sup>ノ</sup>子<sup>散</sup>ふ<sup>べき</sup>樹<sup>種</sup>を<sup>レ</sup>もち<sup>て</sup>韓<sup>地</sup>に<sup>殖</sup>す<sup>べ</sup>  
して<sup>ハ</sup>盡<sup>ク</sup>以<sup>て</sup>持<sup>守</sup>り<sup>て</sup>其<sup>妹</sup>大<sup>屋</sup>彦<sup>命</sup>抗<sup>津</sup>彦<sup>命</sup>  
と共に<sup>ハ</sup>筑<sup>紫</sup>より<sup>始</sup>て<sup>ハ</sup>大<sup>八</sup>洲<sup>之内</sup>に<sup>殖</sup>播<sup>さ</sup>じ<sup>と</sup>言<sup>ハ</sup>ふ<sup>不</sup>  
なく<sup>して</sup>青<sup>山</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>紀</sup>伊<sup>國</sup>の<sup>所</sup>祭<sup>之</sup>神<sup>是</sup>也<sup>ト</sup>  
又<sup>ハ</sup>え<sup>し</sup>う<sup>者</sup>功<sup>之</sup>神<sup>と</sup>素<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>より<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>五<sup>十</sup>續<sup>て</sup>伊<sup>曾</sup>  
曾<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>其<sup>義</sup>伊<sup>佐</sup>と<sup>同</sup>く<sup>其</sup>神<sup>功</sup>を<sup>レ</sup>称<sup>せ</sup>し<sup>不</sup>と  
又<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>す<sup>其</sup>神<sup>名</sup>式<sup>に</sup>紀<sup>伊</sup>國<sup>名</sup>草<sup>部</sup>に  
伊<sup>太</sup>祁<sup>曾</sup>神<sup>社</sup>大<sup>至</sup>祁<sup>比</sup>賣<sup>神</sup>社<sup>都</sup>祢<sup>祁</sup>比<sup>賣</sup>



神社に名神大社と見えしは舊説に其倭古神曾ハ  
五十猛神也といぬ釋日本記〇按るに五十猛續でイタケヒリ姫心一社  
名武吉野國韓國伊太志神社紀伊國の伊志神曾神  
社並上野神と祭れる也イタケヒリイタケ新羅國ハいしゆ韓地即  
イタキ等是一聲の轉せしなり

今朝鮮東南之地也素戔嗚爲神天降りてせしり神  
去ませしはまてのりる舊事記古事記日本記見えし  
不其文特よ長し其大要を撮りてしゆ注書初メ素  
戔嗚神新羅曾尸茂梨之妻に降りたり此地ハ我  
居しむ事也欲ハすと地土を以て船を作りて東に  
渡りてあま玉殿の河上高上峯にふりたり若戸峯梨ハ  
私記ハ詳し  
此中見えたるは新羅の國ハ神を多し事とほりさしめりしをいふ似し  
地土を以て船を作りて其事と神とす登きたりしゆあま玉殿即今の  
出雲國の地歟河ハ古事記ハ肥前川とある其國の凡之記ハ其河上より  
斐伊川とある大京の郡ハ其地仁多郡新上峯とあり其河上より

著流しをりて水の上に人ありとおぼしめて見る見上り  
往りて老夫と老女と二人ありて童女成中と云は泣く其  
名を問ふあり老夫答て我ハ國神大山津見神の子我名ハ  
足摩乳妻名ハ奇摩乳女此名ハ奇稻田比賣といぬ大山  
津見  
神ハ前見えしは伊弉諾伊弉冉二神生るいしりぬ速秋津日子神速  
秋津比賣神の生みしなり是摩乳ハ古事記ハ足名推と云り  
日本記ハ脚摩と云り奇摩乳ハ古事記ハ奇名推と云り日本記ハ  
奇摩と云り奇名推と云り奇名推と云り日本記ハ奇名推と云り  
奇名推と云り奇名推と云り其哭由を問ふいしり我子  
と云りハの稚女あり高志の八岐大蛇毎年ふり喫ふ  
今又來るべき時ありたりと泣くし其形問ふと彼眼ハ  
赤加賀裂此如くして身ハ一ツ八頭八尾ありて是れハ  
蘿又松柏楯櫓生ハ其長谿八谷峽八尾ノ度其腹を



又々子とくく常々血<sup>+</sup>瀾<sup>+</sup>れたりと<sup>+</sup>り<sup>+</sup>ぬ<sup>+</sup>  
高志ハ出雲國神門  
郡ニある古志御と云

八岐大蛇古事記ハ八俣表智と云れ上世の時と或ハ大蛇と云ハ  
蜘蛛と云れハ是皆惡神の其類と殘害する者と稱せ也來り<sup>+</sup>嘯<sup>+</sup>と  
リハ其劫奪と云レハ赤加賀智とハ融<sup>+</sup>智<sup>+</sup>と云レハ一ノ八尾あり<sup>+</sup>ハ一人<sup>+</sup>  
ハ谷八尾の地と稱る<sup>+</sup>又ハ其先カ八頭あり<sup>+</sup>もある<sup>+</sup>ハ特<sup>+</sup>と大蛇と  
是又我カ文の神なり

汝乃女ハ我々<sup>+</sup>な<sup>+</sup>む<sup>+</sup>や<sup>+</sup>との<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>い<sup>+</sup>し<sup>+</sup>よ<sup>+</sup>あ<sup>+</sup>く<sup>+</sup>又<sup>+</sup>所<sup>+</sup>名<sup>+</sup>を  
覺<sup>+</sup>じ<sup>+</sup>と<sup>+</sup>す<sup>+</sup>我ハ天照大御神比沙天より今降れり  
云ハ<sup>+</sup>クハ其父母の神<sup>+</sup>さ<sup>+</sup>う<sup>+</sup>バ<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>む<sup>+</sup>と<sup>+</sup>す<sup>+</sup>  
則湯津洋<sup>+</sup>洋<sup>+</sup>る<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>取<sup>+</sup>成<sup>+</sup>して<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>盤<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>挿<sup>+</sup>り<sup>+</sup>其<sup>+</sup>父<sup>+</sup>  
母の神<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>告<sup>+</sup>て<sup>+</sup>八<sup>+</sup>垣<sup>+</sup>折<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>を<sup>+</sup>醗<sup>+</sup>又<sup>+</sup>廻<sup>+</sup>垣<sup>+</sup>作<sup>+</sup>り<sup>+</sup>  
其垣<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>ツ<sup>+</sup>の<sup>+</sup>門<sup>+</sup>と<sup>+</sup>作<sup>+</sup>り<sup>+</sup>毎<sup>+</sup>門<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>ツ<sup>+</sup>の<sup>+</sup>佐<sup>+</sup>更<sup>+</sup>志<sup>+</sup>を<sup>+</sup>結<sup>+</sup>ハ  
その佐<sup>+</sup>更<sup>+</sup>伎<sup>+</sup>と<sup>+</sup>に<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>船<sup>+</sup>を<sup>+</sup>造<sup>+</sup>て<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>を<sup>+</sup>盛<sup>+</sup>り<sup>+</sup>と<sup>+</sup>持<sup>+</sup>と<sup>+</sup>む

カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>又<sup>+</sup>内<sup>+</sup>名<sup>+</sup>を<sup>+</sup>是<sup>+</sup>に<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>其<sup>+</sup>童<sup>+</sup>女<sup>+</sup>也<sup>+</sup>或<sup>+</sup>云<sup>+</sup>人<sup>+</sup>多<sup>+</sup>名<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>又<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>る<sup>+</sup>神<sup>+</sup>也<sup>+</sup>  
知<sup>+</sup>り<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>い<sup>+</sup>と<sup>+</sup>を<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>と<sup>+</sup>云<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>ん<sup>+</sup>と<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>名<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>と<sup>+</sup>云<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>ん<sup>+</sup>と<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>也<sup>+</sup>湯津洋  
る<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>初<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>足<sup>+</sup>と<sup>+</sup>被<sup>+</sup>童<sup>+</sup>女<sup>+</sup>と<sup>+</sup>洋<sup>+</sup>る<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>取<sup>+</sup>成<sup>+</sup>して<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>盤<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>挿<sup>+</sup>り<sup>+</sup>其<sup>+</sup>父<sup>+</sup>  
童<sup>+</sup>女<sup>+</sup>を<sup>+</sup>隠<sup>+</sup>し<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>き<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>又<sup>+</sup>其<sup>+</sup>名<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>柳<sup>+</sup>名<sup>+</sup>田<sup>+</sup>比<sup>+</sup>賣<sup>+</sup>又<sup>+</sup>久<sup>+</sup>志<sup>+</sup>伊<sup>+</sup>太<sup>+</sup>右<sup>+</sup>伎<sup>+</sup>比<sup>+</sup>洋<sup>+</sup>と<sup>+</sup>  
い<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>又<sup>+</sup>其<sup>+</sup>事<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>神<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>告<sup>+</sup>て<sup>+</sup>た<sup>+</sup>め<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>る<sup>+</sup>是<sup>+</sup>又<sup>+</sup>我<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>文<sup>+</sup>の<sup>+</sup>神<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>八<sup>+</sup>岐<sup>+</sup>折<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>醗<sup>+</sup>成<sup>+</sup>して<sup>+</sup>其<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>絞<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>  
其<sup>+</sup>糟<sup>+</sup>と<sup>+</sup>絞<sup>+</sup>り<sup>+</sup>更<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>其<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>を<sup>+</sup>用<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>て<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>醗<sup>+</sup>す<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>岐<sup>+</sup>と<sup>+</sup>云<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>と<sup>+</sup>醗<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>す<sup>+</sup>  
今<sup>+</sup>世<sup>+</sup>も<sup>+</sup>一<sup>+</sup>度<sup>+</sup>と<sup>+</sup>下<sup>+</sup>地<sup>+</sup>と<sup>+</sup>す<sup>+</sup>折<sup>+</sup>と<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>岐<sup>+</sup>折<sup>+</sup>返<sup>+</sup>す<sup>+</sup>此<sup>+</sup>謂<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>り<sup>+</sup>と<sup>+</sup>新<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>云<sup>+</sup>え<sup>+</sup>り<sup>+</sup>  
舊<sup>+</sup>事<sup>+</sup>記<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>醗<sup>+</sup>の<sup>+</sup>字<sup>+</sup>を<sup>+</sup>用<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>ら<sup>+</sup>る<sup>+</sup>是<sup>+</sup>又<sup>+</sup>厚<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>又<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>る<sup>+</sup>伏<sup>+</sup>更<sup>+</sup>伎<sup>+</sup>  
舊<sup>+</sup>事<sup>+</sup>記<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>服<sup>+</sup>殿<sup>+</sup>の<sup>+</sup>字<sup>+</sup>と<sup>+</sup>用<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>ら<sup>+</sup>る<sup>+</sup>釋<sup>+</sup>日<sup>+</sup>本<sup>+</sup>記<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>今<sup>+</sup>俗<sup>+</sup>ノ<sup>+</sup>樓<sup>+</sup>浦<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>伏<sup>+</sup>更<sup>+</sup>  
伎<sup>+</sup>の<sup>+</sup>法<sup>+</sup>老<sup>+</sup>の<sup>+</sup>稱<sup>+</sup>也<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>樽<sup>+</sup>を<sup>+</sup>設<sup>+</sup>けて<sup>+</sup>垣<sup>+</sup>門<sup>+</sup>服<sup>+</sup>殿<sup>+</sup>等<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>ツ<sup>+</sup>ツ<sup>+</sup>を<sup>+</sup>化<sup>+</sup>ら<sup>+</sup>せ<sup>+</sup>  
し<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>其<sup>+</sup>大<sup>+</sup>蛇<sup>+</sup>八<sup>+</sup>頭<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>也<sup>+</sup>す<sup>+</sup>べ<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>彼<sup>+</sup>大<sup>+</sup>蛇<sup>+</sup>の<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>と<sup>+</sup>  
沈<sup>+</sup>面<sup>+</sup>す<sup>+</sup>る<sup>+</sup>を<sup>+</sup>用<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>て<sup>+</sup>盛<sup>+</sup>宴<sup>+</sup>と<sup>+</sup>設<sup>+</sup>て<sup>+</sup>カ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>八<sup>+</sup>岐<sup>+</sup>大<sup>+</sup>蛇<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>不<sup>+</sup>の<sup>+</sup>  
如<sup>+</sup>く<sup>+</sup>も<sup>+</sup>來<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>毎<sup>+</sup>船<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>己<sup>+</sup>ガ<sup>+</sup>頭<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>其<sup>+</sup>酒<sup>+</sup>を<sup>+</sup>飲<sup>+</sup>み<sup>+</sup>  
飲<sup>+</sup>み<sup>+</sup>醉<sup>+</sup>て<sup>+</sup>死<sup>+</sup>に<sup>+</sup>ぬ<sup>+</sup>り<sup>+</sup>伏<sup>+</sup>寝<sup>+</sup>たり<sup>+</sup>素<sup>+</sup>戔<sup>+</sup>美<sup>+</sup>彥<sup>+</sup>神<sup>+</sup>帶<sup>+</sup>せ<sup>+</sup>る<sup>+</sup>  
十<sup>+</sup>握<sup>+</sup>の<sup>+</sup>鈕<sup>+</sup>を<sup>+</sup>接<sup>+</sup>きて<sup>+</sup>其<sup>+</sup>蛇<sup>+</sup>切<sup>+</sup>截<sup>+</sup>す<sup>+</sup>と<sup>+</sup>數<sup>+</sup>川<sup>+</sup>血<sup>+</sup>と<sup>+</sup>  
あり<sup>+</sup>て<sup>+</sup>流<sup>+</sup>る<sup>+</sup>其<sup>+</sup>中<sup>+</sup>尾<sup>+</sup>切<sup>+</sup>截<sup>+</sup>す<sup>+</sup>と<sup>+</sup>御<sup>+</sup>劍<sup>+</sup>乃<sup>+</sup>又<sup>+</sup>















孫は即大國を祚也とあるは古語拾遺より見えし所也  
大己貴神を以て素戔嗚神の弟子とす其志は所  
名因トカク素戔嗚と上右に事其微と素戔嗚とありき  
多如くの事但し舊事記并に日本記に大物主大國  
玉神とすすは舊事記に素戔嗚為神の弟子大年  
神須須比神乃女伊弉諾命娶りて生む所の子  
大國即鬼神ハ大和の神也とあるされし神  
谷武内大和國山色郡大和の坐に大國鬼神  
こりふもの即此也大物主神の事ハ下の記に見えたる  
其後大己貴神ハ素戔嗚命とす二柱神并に中國此

如水母浮漂之時トキ坐イと相並イ此國地作り之川其少  
產名神ハ遂に常世國に渡り多しぬ國中の由り成り  
所をば大己貴神獨能く巡り多しぬ是舊事記にあり  
大己貴神ハ前注に詳也少產名命ハ舊事記に祚ハ  
祚皇產靈神の弟子と坐えて天神より上りて高皇  
產靈イ尊坐りて吾兒也とのイ坐見イ也と見えたる古事  
紀のハ神產巢日祚の弟子少產名命イ古那神と坐り  
日本紀古語拾遺等にハ高皇產靈此弟子也と坐り  
葦原中國如水母浮漂とハ終りぬ多し此用幣流ル之  
國と云々如くに國いさゞ定イんば水母イ此方上に  
浮むが如く成哉云々初伊弉諾伊弉冉此神造り







害哉穰ハル北人ためよ其標ハシ厭ナヒ之法哉定めらるる哉

不フシて百性ヒト今よ玉りまてあといく思頼シヨクを蒙カフれ

經營ケイエイの字讀事造の字此コト一顯見の字讀て干都斯カンツのりぬ茶生チヤウの

字讀む身ミ前マヘ是草クサのこ一畜養チクヤウハ半馬ハンバの類也療病リョウビョウの方カタは即醫

某ナニの多也魯ロ歎ト昆クニ表ヒラの災害サイガイとすをてこれらの災サイ災ガイある一害ガイ哉

ちををよ禁キン厭ナヒ之法ホウハ則スレバク呪禁クヱキン事コト之恩オン於オは纂サン疏ス利澤リタクの程ハジメを

と云イハゆ其ソノ凌レイ少女シヤウニョウ名ナ神カミハ熊野クマノと涉セツ禰ニ行ユク玉タマりて

法ホウをヲ常世トコヨシ國クニよいきませり又ハ淡路タンロに到キりて粟アハ莖カヲ子

彈タマれ渡ワタりて常世トコヨシ郷サトよ玉タマりま〜きとも中ナカ也

熊野クマノの所トコロ傳ツタは其ソノ委ウチ不詳フシヤウ淡路タンロハ伯耆ハクケ玉タマ風土フツチ記キ上ノ相見サイケン郡クニ北キタの餘ヨリ里リ

粟アハ莖カヲ子コ少シ日子ヒコ余ヨ粟アハと強ツヨクりて常世トコヨシ國クニよ渡ワタりま〜地チ

栗アハ莖カヲとトいぬといふイハた王オウ常世トコヨシ國クニ常世トコヨシ郷サトハ舊キウ説セツみ〜是コトハ粟アハ莖カヲ子コ

洗セン磯イソ前マヘ神カミ降カミりて入イリマ〜憑トモる車クルマあり我ワレハこれ大オホ奈ナ母ハハ知チ少シハ古コ奈ナ命メ

式シキよ又マタえ〜常世トコヨシ國クニ康カウ傳ツタ郡クニ大オホ洗セン磯イソ前マヘ神カミ社ヤ此ココ也ナリ一ヒト

見ミえ〜所トコロあ〜げて教ツケふ〜處トコロ一ヒトか〜て大オホ貴キ神カミ我ワレ

獨トクい〜よ〜てよ〜此ココ玉タマ造ツク作スる事コト必カナラ得エむい〜此ココの神カミ

我ワレと能スく此ココ玉タマ相アイ似ニむと憂ウレハ〜ふ〜又マタ海ウミ之ノ伝ツタへ

來キル神カミ者モノて能スく我ワレ前マヘを法ホウのハ我ワレ能スく共トモニ〜ハ〜儀ギ也

と〜志シく〜は〜國クニ御ミ難ガタけむといぬ所トコロを法ホウを〜此ココ

狀カタチい〜むと同ドウく〜ハ〜我ワレとハ倭ヤマトの青アヲ垣キ東ヒガシ山ヤマの上ノ上ノ伊イ

弒ツキ伎キなれと答コタへらふされハ御ミ諸モロの山ヤマ北キタ上ノ上ノ坐イマスす所トコロの

神カミ也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ

神カミ其ソノ神カミ子コ目メ茂モ君キミ大オホ三サン輪リン君キミホ〜也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ

止トド義ギ也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ

是コト等トナリの說セツ盡ツクく信シずる〜上ノ古コ也ナリ一ヒト我ワレハ此ココ玉タマの幸サイ意イ新ニ造ツク也ナリ

今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜

今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜

今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜今イマの文字モノあり〜



高野  
文庫

古史通卷之二終

教部省  
文庫印

時<sub>レ</sub>或ハ其義を取或ハ其字の聲を借りて此等の説あるべき事<sub>レ</sub>の  
とも<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>又舊事記<sub>ニ</sub>兄<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>所ハ神のこ<sub>ト</sub>ば<sub>レ</sub>我ハ汝の事<sub>レ</sub>の  
奇<sub>レ</sub>鬼術<sub>レ</sub>鬼術<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>神也<sub>ト</sub>の<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>鬼<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>  
その<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>陽<sub>レ</sub>鬼<sub>レ</sub>陰<sub>レ</sub>鬼<sub>レ</sub>の外<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>い<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>鬼<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>俗<sub>ニ</sub>佐<sub>レ</sub>枳<sub>レ</sub>  
多<sub>レ</sub>摩<sub>レ</sub>俱<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>美<sub>レ</sub>拖<sub>レ</sub>摩<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
法<sub>レ</sub>代<sub>ニ</sub>及<sub>レ</sub>び<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>也<sub>ト</sub>古<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>記<sub>ニ</sub>見<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ハ  
其<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
神<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>式<sub>ニ</sub>大<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>郡<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>社<sub>ニ</sub>と<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>輪<sub>レ</sub>社<sub>ニ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
祖<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
此<sub>レ</sub>後<sub>ニ</sub>大<sub>レ</sub>己<sub>レ</sub>貴<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
は<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>

神造天下大神也



